

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 2 年目)

1. 研究課題

21 世紀の人文科学 — Our Age を問う

Humanities in the 21st Century: An Attempt at Understanding Our Age

2. 研究代表者氏名

岡田暁生, 小関隆, 佐藤淳二

Akeo OKADA, Takashi KOSEKI, Junji SATO

3. 研究期間

2018 年 04 月 - 2021 年 03 月 (2 年度目)

4. 研究目的

本研究の狙いは次の三点である: 1: 私たちが今生きている、この息苦しく先が見えない世界 — それは一体なんであるのか、そしてそれはいつ始まったのかについて、それを「Humanities の危機」という相のもとに問う。それは同時に「21 世紀の人文科学 Humanities の可能性」についての存在論的問いともなるはずである。2: 本研究は必然的に、同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、人文科学固有のアプローチを目指すこととなる。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が中心となる。その際に 1970 年代が一つの焦点となるであろう。3: 本研究のもう一つの焦点は芸術である。すなわち「人文科学の危機」と「芸術の危機」を、「人間性の危機」という点で同根のものとして想定し、単に 1970 年代以後の芸術を研究対象とするのみならず、芸術創作に携わる人々との連携を深め、そこから人文科学の可能性についての示唆を得ることを目標とする。本研究班は、歴史・思想・芸術という人文科学研究の三本柱の間の密接な連携を深めるべく、敢えて岡田暁生・小関隆・佐藤淳二という三人の班長を立てることとする。これは、一人の班長(そしてその専門分野)へと研究成果を一元的に収斂させず、ディシプリン間の真の融合を目指すという意志を示すものである。

1. What is the current world in which we have been living without clear outlook for future? When did our age commence? These are the primary questions the project would investigate. The main hypothesis the project posits is that our age has been an age of the crisis of humanities. The hypothesis implies an inquiry into the validity of humanities as a distinct academic field in the 21st century.

2. In its examination of our age the project would adopt a historical approach. It is expected that the 1970s, a likely starting point of our age, will be a period to be most intensively examined. 3. The project would pay much attention to the field of art, for the crisis of humanities and that of art seem to be two faces of the same phenomenon. The collaboration with artists is one of the characteristic aspects of the project.

5. 本年度の研究実施状況

2019 年度は 11 回の研究会を開催した。本研究班の問題関心は「システム内存在としての世界」についてのアートを媒介とする文理融合的研究」班のそれと重なるところが大きく、4 回の研究会は同班との共同開催とされた。根本的な問いは「この世界はいつ始まっていたか」「この世界は何なのか」「この世界をどうすればよいのか」という、過去・現在・未来にかかわる問題であるが、本年度は、昨年度に引き続いて「いつから始まっていたか」という第一の問いへの取り組みを継続するとともに、新たに「この世界は何なのか」という第二の問いにかかわって、中動態、人新世、といった概念をめぐる議論にも着手した。参加者はのべ 175 名（うち女性 20 名、若手 45 名、大学院生 18 名、私立大学 32 名、国立他大学 46 名）であった。また、2 回の研究会については、関西イギリス史研究会からも参加者を求め、積極的な反応を得た。さらに、2020 年 3 月 18 日には特別例会として国際ワークショップ **European Crisis in Historical Perspectives** を開催した。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

2019-04-07 「話したい人」と「見せたい人」と「やってみたい人」と 一人文工学としてのアートの可能性を考える 発表者 岡田暁生

2019-04-27 Elements for a Theory of Post-68 Marxism 発表者 Gavin Walker
McGill University

2019-05-17 1960 年代はサッチャリズムを呼び出したのか？ 発表者 小関隆

2019-05-25 60 年代アメリカと「ニューディール」の退潮：去り行くリベラル政治の現代史 発表者 中野耕太郎 大阪大学文学部

2019-07-08 精霊を待ちのぞむ？ — 中動態としての憑依 発表者 石井美保
「中動態」への補足資料 発表者 佐藤淳二

2019-07-20 マルグリット・デュラス「人間の終焉」以後の自伝的エクリチュール 発表者 森本淳生

2019-10-05 人新世の人類学—滅びゆく世界のなかで生きるということ 発表者 田辺明生
東京大学

- 2019-11-16 「英国病」か「黄金時代」か？ ― 過ぎ去ろうとしない 1970 年代 発表者 長谷川貴彦 北海道大学
- 2019-12-13 人新世におけるアートと哲学―「人間以後」の思考と実践 発表者 篠原雅武 京都大学
- 2020-03-18 An archaeology of populism: 'The people' in European political discourse 発表者 Serena Ferente King's College, London
- The End of 'Post-wars' Europe?: Introductory Remarks on Brexit 発表者 Takashi Koseki

8. 共同研究会に関連した公表実績

なし

9. 研究班員

所内

立木康介、森本淳生、王寺賢太、藤原辰史、伊藤順二、上尾真道

学内

吉岡洋(こころの未来研究センター)、小堀慎吾(文学研究科博士後期課程)

学外

長谷川貴彦(北海道大学)、中野耕太郎(大阪大学)、田辺明生(東京大学)、三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、上田和彦(関西学院大学)、坂本優一郎(関西学院大学)、橋本伸也(関西学院大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

なし

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

次年度も継続して「現代」のルーツとしての 1970 年代の歴史研究を研究しつつ、コロナ禍で露になったこの半世紀の人文的諸問題について、芸術および科学に携わる人々との対話を通して認識を深める。またやがてくるコロナ後を「21 世紀の戦後」と位置づけ、ダブリン UCD 大学と継続中の「戦後」についての研究の一環とし、また IAMAS(情報科学芸術大学院大学)

と連携しつつ文芸理融合プロジェクトを進める。後者はメディアアートを通して人文学メッセージを感性的に社会発信する新しいアウトプット形式の模索の試みである。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等
なし